

意味論と語用論の間

——意味論的最小主義 vs 文脈主義——

服部裕幸

§ 1 序

言語の理論的研究において統語論、意味論、語用論という区別がなされているのは周知のことであるが、そのような区別に対する異議申し立てがないわけではない。とりわけ意味論と語用論の区別に関してはそうである。はじめにこの辺りの事情を簡単に説明しておこう。

(1) 太郎は結婚している

日本語を知っているほとんどの大人は表現(1)の意味を（それが何であれ）知っている（と思っている）。しかもその表現がどんな状況で言われようと、である。つまり、表現(1)はそれ自体として意味を持っている（ように見える）のである。そして、意味論はそのような意味についての諸現象の説明をめざす。他方、その表現は発話の状況によっては、聞き手に、太郎に恋心を抱いてもかなわない可能性が高いのであきらめた方が良いというメッセージを伝えるかもしれない。また、話し手もそのことを意図してその表現を口にするかもしれない。その意味ではその表現は、太郎に恋心を抱いてもかなわない可能性が高いのであきらめた方が良い、という意味を持っていると言えないこともない。しかし、それは表現(1)自体が持つ意味ではない、その表現（の意味）を用いて話し手が（意図していたにせよ、そうでなかったにせよ）聞き手に伝えたことである。この辺りのメカニズムを語用論は研究するというわけである。

しかし、Philosophical Investigations(1953)の著者ヴィトゲンシュタインやその

影響を受けた人々はこのような区別に懐疑的であるように見える。表現(2)のような例を考えると彼らの考えていることがある程度想像できる。

(2) 台石

ヴァイトゲンシュタインは、表現(2)の意味はその使用の状況ないし文脈（彼の用語では言語ゲーム）によって決まるのであって、それ自体の意味を問うことはできないと考えていたようなのである。すなわち「語の意味とは言語の中におけるその使用」なのである。

意味論と語用論の区別に関するこのような議論は、意味論や語用論の研究がまだ十分進んでいなかった当時はあまり大きな論争にならなかったのかもしれないが、意味論や語用論における近年の研究の進展を背景に、人々の間にかなりの関心を喚起しているように思われる。すでに旧聞に属するが、語用論と独立に意味論が可能であることを擁護するキャペルンとルポアの *Insensitive Semantics* (2005) が出版されると、ただちに賛否両論の議論が巻き起こり、両陣営からの論文からなる論文集がいくつも出版された⁽¹⁾のがその一つの証拠であろう。

筆者は不勉強でこの論争を十分にフォローしていないので、断定的なことは言えないが、両陣営の議論を見る限り、議論が細かくなってくるにつれて争点が次第にぼやけてきているように思われる。はたして両陣営にどれほどの見解の相違があるのか、と疑問に思えてくることさえある。そこで、本稿では意味論と語用論の間の論争に本当に争点はあったのか、あったとすれば真の争点は何であったのかを今一度明確にしようと思う。

§ 2 両陣営で共有されているもの (のいくつか)

大雑把に言えば、この論争の一方の陣営（文脈主義者(contextualist)）は、表現の意味は状況ないし文脈によってはじめて与えられるのであって、それを離れて意味を語ることはできないと主張する。これに対して、もう一方の陣営（意味論的最小主義者(semantic minimalist)）は、状況や文脈から切り離して表現の意味を語る

ことは可能であるとする。しかし、より厳密に言えば、意味論的最小主義者（以下では単に最小主義者と略記する）も、すべての表現が状況や文脈から切り離して意味を持つとは主張しない。彼らも若干の表現は状況や文脈から切り離したら意味は持たないと考えている。その若干の表現とは「私」や「今」や「ここ」や「昨日」などのような指標語である。したがって、両陣営が明確に対立すべきであるとすれば、文脈主義者の主張は、すべての言語表現が指標語のような性格を持っている、というものでなければならないだろう。しかし実際には、(ヴィトゲンシュタインのような人はともかく)多くの文脈主義者はそこまで過激な主張はしない。彼らは、最小主義者が考えるよりも多くの表現が文脈依存的だと主張するのである。したがって、キャペルンとルポア（以下ではCLと略記する）にしたがえば、文脈主義には過激な文脈主義と穏健な文脈主義が存在することになり、後者の立場を取れば、実は対立はそれほど大きなものではなくなるかもしれない⁽²⁾。

ところで、この論争においては両陣営とも、意味論について語るときにはその理論的な枠組みとして真理条件意味論をとることを前提しているように見える。なお、ここで真理条件意味論と言う場合には、狭義のデイヴィッドソンに由来する意味理論⁽³⁾が念頭に置かれているわけではなく、可能世界意味論やより一般的に形式意味論と呼ばれるようなものも含まれているということである。これは、近年の意味論研究の進展を考えれば、当然かもしれないが、このことはまた、実は両陣営の対立がどれくらい大きいかということへの疑問にもつながることにもなるのである。たとえば、状況意味論のようなものを考えたとき、これはどちらの陣営に属するのだろうか。また、最小主義者を批判する論者の中には真理条件語用論(truth conditional pragmatics)なるものを提唱するものもいる⁽⁴⁾が、彼らははたして文脈主義者の陣営にいるのだろうか。

他にも、両陣営で共有されているものはあると思うが、ここでは以上の二点を心にとどめておこう。

§ 3 文脈主義者の主張とその論拠

本節では文脈主義者の主張とその論拠を簡単に見ていきたい。次の例文を考えてみよう。

(3) 太郎は背が高い

この文の意味をその真理条件であるとする、文(3)がどのような場合に真となり、どのような場合に偽となるかを考えねばならない。ところが、(3)は、小学生としては背が高い方かどうかというような会話の文脈では真となるかもしれないが、バレーボール選手として背の高い方かどうかという会話の文脈では真ではないかもしれない。ということは、(3)の真理条件は文脈によって変わるということである。そうであるとすれば、真理条件意味論を前提にすれば、(3)の真理条件が文脈によって変わる以上その意味も文脈によって変わると言わざるをえないのではないか。これが文脈主義者の基本的な考え方(の一つ)である。このような議論をCLは文脈移行論法と呼んでいる⁽⁵⁾。同様の議論は次の例文についても容易に行なうことができよう。

(4) 部屋は空っぽだった

この文は、刑事たちが容疑者のアパートに踏み込んだときに言われたのであれば、たとえ、居間にソファやベッドがあり、台所には冷蔵庫や食器棚があり、洗面所の片隅に洗濯機があっても、人が誰もいなければ真とされるであろう。しかし、新しく部屋を借りたい、ないしは買いたいと思っている人が不動産業者とともにある部屋を訪れたときに、同様の状況を目にして言われれば、明らかに偽とされるだろう。

(5) そのヤカンが黒い

この文も、そのヤカンが元々はステンレス製のピカピカであったものが、長い間使用しているうちに黒ずんできて、その様子を言うために口にされることもあれば、ホーロー引きの製品でその色が黒であることを言うために口にされることもあろう。したがって、黒ずんだステンレス製のヤカンについて、後者の意味で理解され

れば(5)は偽であるが、前者の意味で理解されれば(5)は真である。そして、どちらの意味で理解されるかは発話の文脈によって変わるであろう。ということは、(5)の真理条件は文脈によって変わるということなのである。

文脈主義を支えるもう一つの議論は上の議論と似ている(し、本質的には同じかもしれない)が、次のようなものである。

(6) 春子は(もう)準備ができている

外出しようとしているときにこの文が言われたとしても、化粧が済んでもう出かけられるのかどうか問題になっている場合と、翌日に控えた試験に対する備えが十分かどうか問題になっている場合とで、その事情は変わってくるであろう。準備ができていうときに、何に対する準備ができていうのかによってその真偽は変わるのである。このことは、文(6)の真理条件が文脈によって異なるということであり、それはとりもなおさず、その文の意味が文脈によって異なるということの意味する。このタイプの議論を CL は不完全性論法と呼んでいる⁽⁶⁾。同様の議論は次の例文によっても容易に構成できよう。

(7) 鉄は十分な強さを持っていない

(8) 秋江(の体重)は60キロである

§ 4 意味論的最小主義者の批判

さて、以上のような文脈主義者の主張に対して最小主義者はどのように批判したのだろうか。本節ではこの点を簡単に見てみよう。主要な論点は二つあるが、一つずつ見ていこう。

4-1 文の意味(s意味)と発話の意味(u意味)を区別する必要がある

前節で見たように、文脈主義者の議論では例(3)~(8)のいずれにおいても、真や偽が問題となっている(したがってまた、真理条件が問題となっている)のは、文そのものではなく、実はその文の発話である。たとえば、小学生として背が高い方

かどうかが問題になっているときに文(3)が言われれば、それは真になるかもしれない。また、バレーボールの選手として背が高い方かどうか問題になっているときに文(3)が言われれば、それは偽になるかもしれない。いずれにしても、そこで真理値を与えられるのは文(タイプ)そのものではなく、その文の発話である。しかし、最小主義者が意味を問題にするときには、文(タイプ)そのものなのである。最小主義者も発話が(文脈によって)多くの意味を持つことは否定しない⁽⁷⁾。彼らは、文(タイプ)そのものはどの文脈でも同じ意味を持つと主張するのである。要するに、文脈移行論法でも不完全性論法でも、そこで問題になっているのは発話の意味(u意味)であって、文そのものの意味(s意味)ではない。結局のところ文脈主義者は文の意味と発話の意味を混同している、というのが最小主義者の反論である。この反論が適切であれば、文の意味=文の真理条件という主張は文脈主義者の事例によっては退けられていないことになる。

4-2 文脈主義が正しければ、言語的コミュニケーションは成功しえない

第2節においてすでに示唆したところであるが、多くの文脈主義者は実は、すべての言語表現の意味が文脈依存的だとは主張せず、指標語のように明らかに文脈依存的な語を別にしてもいくつかの言語表現(たとえば、「背が高い」や「準備ができています」など)が文脈依存的だと主張するにとどまっている。すなわち、文脈主義には過激な文脈主義(radical contextualism)(RC)と穏健な文脈主義(moderate contextualism)(MC)があるのである。すると、文脈主義者と最小主義者の相違は程度の差にすぎないとされる可能性が高くなる。CLはその結論を嫌い、両者の間には大きな断絶があると主張したいようである。彼らは概略、次のように論ずる。第1に、(滑りやすい坂論法(slippery slope argument)によって)MCはRCを帰結する。第2に、RCが正しければ、われわれの言語によるコミュニケーションが成功するはずがない(か、もしくはその成功は奇跡によるとしか考えられない)。しかし、われわれは言語によるコミュニケーションに成功している(しかも、おそら

くそれは奇跡ではない)。故に、MC であれ RC であれ、文脈主義は誤っている⁽⁸⁾。

文脈主義の基本的なアイデアは RC においてもっともよく表現されていると思われるので、上の議論の核心は、RC が正しければわれわれの言語によるコミュニケーションが成功するはずがない、という部分であろう。では、この部分の主張の論拠は何なのだろうか。それは要約すると次のようなものである。もし RC が正しければ、どのような表現 (タイプ) であれ、それ自体としては意味を持たず、したがって当然その意味を言語共同体の構成員が共有することもあり得ない。すると、ある話し手が何らかの表現 (タイプ) を用いて何かを意味したとしても、聞き手はそれを知る手だてがないので、相手の意味したことを理解することができないであろう。それ故、RC が正しいとすると言語によるコミュニケーションが不可能になってしまう、というわけである。

§ 5 文脈主義者の反撃

前節で見たような最小主義者の批判に対して文脈主義者はさまざまな方面から反論可能であるし、また実際、反論を加えているが、ここではそのいくつかを簡単に見てコメントを加えていきたい。

5-1 滑りやすい坂論法は有効ではない

一般論として、滑りやすい坂論法は明確な境界線を引くことが困難であることを示すには有効かもしれないが、そのことから、境界線から遠くはなれた (したがって明確に区別可能な) 二つの項目のうち的一方について妥当することが他の項目についても妥当すると結論することはできない。

さらに、文脈主義者が適当な基準を提案して、意味が文に依存する言語表現の範囲を示すことができれば、MC が結局は RC に帰着するという議論も論駁可能である。そして、事実、何人かの論者はそのような主張を行なっている⁽⁹⁾。

この種の反論が成功すれば、文脈主義と最小主義の違いは程度の差ということに

なり、両者の間の論争はとりたてて騒ぎ立てるほどのものではないかもしれない。

5-2 RCでもコミュニケーションの可能性は説明可能である

前節で見たように、RCが正しければわれわれはコミュニケーションができ（事実を説明でき）ないことになってしまうだろう、とCLは主張する。それは、異なる状況や文脈でおなじ表現（タイプ）が用いられても、（RCによれば）それらの間に共通の意味がないので、以前に聞いたことがある表現を再び聞いたとしても聞き手はそこから意味理解のための何らかの手がかりをえられないはずだからであった。しかし、多くの文脈主義者は、何らかの言語表現Eがさまざまな状況で用いられるにもかかわらず、その用いられ方に（音声的に同一（または書き言葉であれば形式的に同一）であること以上の）ある種の共通性があることを認め、その共通性が言語共同体の話者の間で共通の知識として存在することを認める。したがって、ある話し手がある状況でEと発話したとき、聞き手はその発話の意味を理解するにあたってEについて何の手がかりも持たないわけではない。たとえば、彼らはEの形式的な特徴についての知識は持っているのである⁽¹⁰⁾。

「私」という表現の場合で具体的に考えてみよう。（ちなみに、これは最小主義者もその意味が例外的に文脈依存的に決まるとする表現である。）次郎があるバーで「私は酔ってはいない」と言ったとしよう。それを聞いた夏美は、この「私」がこの状況では次郎を指し、したがってこの発話は次郎が酔っていないという意味のものだと理解する。このとき、夏美は「私」についての（日本語話者の皆が共有している）知識（すなわち「私」は発話の状況において発話者自身を指す⁽¹¹⁾という知識）を利用しているのである。同様に、例文(3)「太郎は背が高い」の場合で、太郎の母親がママ友との会話の状況で(3)を言ったとき、それを聞いたママ友は、この状況では「背が高い」は小学生としては背が高い方であるという意味だと理解するが、その際彼女は、「背が高い」という表現は発話の状況において想定されている基準に照らして背が高いという意味を持つ、という、日本語話者が共有する知

識を利用しているのである。文脈主義者が否定するのは、その共有されている知識の中に意味論的な要素が含まれている、ということである。

以上のような反論が有効であれば、4-2のような最小主義者の批判はかわすことができることになる。

もっとも、このような共有されている知識の中に意味論的要素が含まれていないという点については議論の余地がありそうである。というのも、「意味論 (的)」ということでは何を意味するのか、意味論の目的は何かということが実はそれほど明確ではないからである。この点については後にもう一度言及することになろう。

5-3 s意味=文の真理条件、という主張は空虚

文脈主義者は文の意味 (s 意味) と発話の意味 (u 意味) を混同している、という最小主義者の批判は一見するとかなり強力であるように見えるが、これもよく考えてみるとそうではないことがわかる。というのも、文脈主義者はそのような区別の可能性それ自体に対して異議申し立てをしていると思われるからである。したがって、そのような区別が可能であることを前提にした最小主義者の批判は論点先取の過ちを犯しているかもしれない。

最小主義者は、文の意味 (s 意味) はその真理条件であり、それはいかなる文脈においても変わらないと主張するかもしれない。たとえば、例文(3)でいえば、その真理条件は次の通りである。

(T) 「太郎は背が高い」は真である ⇔ 太郎は背が高い

太郎が小学生として背が高かろうと、バレーボールの選手として背が高かろうと、上の真理条件は変わらないのである。この真理条件の知識を日本語話者は皆持っているので、コミュニケーションが可能になるのだというのが最小主義者の主張であるが、文脈主義者に言わせれば、このような真理条件はまったく形式的なものにと

どまり、内実を伴わない空虚なものである。実際、どのような状況であれば太郎が背が高いということになるのかわからなければ、「太郎は背が高い」という文が真であるかどうかはわからないだろう。もしそうであるなら、たとえ誰かが(T)を知っていたとしてもその人はその文の意味を知っているとは言えないであろう。というのも、その人は具体的場面で「太郎は背が高い」という文の真偽を適切に言うことができないからである。そのような人についてわれわれは、彼(女)はその文の意味を知っているとは言わないのではないか。

この難点は (T) に文脈変数のようなものを入れておけば回避できるかもしれない。なぜなら、そのような文脈変数入りの(T)を知っていれば、具体的状況に(T)を適用した時、その変数のところに具体的状況(文脈)を代入することで、「太郎は背が高い」という文がその状況で真なのか偽なのかを言うことができるかもしれないからである。しかし、これは文の真理条件を文脈依存的なものに変えることを意味し、したがって実質的には文脈主義者に相当接近する方策なのである。

§ 6 真の争点

これまで見てきたことからわかるように、文脈主義者も最小主義者も共に、相手の批判に応えるにあたって自らの主張ないし理論を(当然のことながら)より精緻化していき、その結果としていずれの側も相手の主張に近いことを自らが主張する、ないしは認める傾向がある。このため、両者の違いが見えにくくなっているというのがこの論争の現在の状況であるように筆者には思われる。たとえば、表現(タイプ)の意味をカプランの意味でのキャラクター的なものと考えると、どちらの陣営も同じようなことを言っているように見える。

それでは、両陣営の間の論争で、細部の違いではない、何らかの根本的な点に関わる争点はないのだろうか。最小主義者の意味の概念は空虚であり、そのような概念についての知識を持っていても実際には言語表現を使いこなすことができず、したがってその意味を知っているとは言えないであろう、と文脈主義者は批判をする。

それにもかかわらず、最小主義者は意味論を語用論から切り離し、コンパクトな意味理論を構築しようとする。その動機は何なのだろうか。その一つの大きな理由は、文の意味はそれを構成する語や句の意味やその構成の仕方からなっているという常識的な知識や、同義性や多義性や冗長性といったいわゆる意味論的概念の解明に、最小主義的意味理論がそれなりの解答を用意してくれるからである。

これに対して文脈主義者は、仮にそのような理論——その中には、文の意味はその真理条件であるというような主張も含まれている——が構築されたとしても、それを知っても実際に語や文を適切に使用できない（例えば、ある文が真か偽かわからない）以上、語や文の意味を知っている、ないしは理解しているとは言えないと批判する。文脈主義者にとっては、言語表現の意味を知っている、ないしは理解しているとはどのようなことか、ということが重要な関心事なのである。そうである以上、語用論的な要素が意味理論の中に入ってくるのはほぼ必然の流れである。

このように見てくると、文脈主義者と最小主義者の間の争いは、結局のところ、意味論に何を期待するのか、換言すれば、意味論の目的は何か、ということについてなされていることがわかる。簡潔に言えば、前者が、意味論は意味を知っている（又は理解している）ということの研究対象とすべき⁽¹²⁾としているのに対して、後者は、意味論は意味そのものを研究対象とすればよいとするのである。そうであるとすれば、これはパラダイムをめぐる争いであって、容易に決着がつくような性質のものではないだろう。仮に両陣営に論争が当面は沈静化したとしても、今後おそらく、形を変えて再び議論が巻き起こるのではないだろうか。

注

- (1) 二、三冊だけ例をあげると、Bianchi(2004), Preyer and Peter (2007), Szabo(2005) などがある。
- (2) もっとも、CL は、穏健な文脈主義は結局は過激な文脈主義にならざるをえない（後述）と論ずるので、両陣営の対立はやはり抜き差しならないものとされ

る。

(3) Cf. Davidson(1967)

(4) Cf. Clapp(2007)

(5) Cf. Cappelen and Lepore(2005)

(6) Cf. Cappelen and Lepore(2005)

(7) CL は「言語行為多元主義(speech act pluralism)」という言い方をしている。

Cf. Cappelen and Lepore(2005)なお、論者によっては、文の意味と発話の意味の区別は「意味論的内容 (semantic content)」と「言語行為の内容 (speech act content)」という表現を用いて表されることもある。

(8) Cf. Cappelen and Lepore(2005)

(9) たとえば、マイトラはそのような議論を行なっている。Cf. Maitra(2007)

(10) 論者の中にはこれを「青写真 (blueprint)」と呼ぶものもいる。Cf. Clapp(2007)

(11) これはカプラン風に言えば、「私」のキャラクター (character) は状況が与えられるとその指示対象を決定するということである。Cf. Kaplan(1989) 文脈主義者の立場に立てば、キャラクターのようなものが、表現が持つ文脈に依存しない (ないし、すべての文脈に共通な) 要素として存在する、ということになろう。Korta and Perry(2007) はこの立場に近い。もっとも、彼ら自身は自らをどちらかという CL に近いと考えているようではある。

(12) かつてダメットは、文の意味を問題にするときには文の意味の理解を問題にすべきであるとして、デイヴィドソンの意味論についての考え方に対して異議を唱えたが、このダメットの見解は文脈主義者に通じるものがある。Cf. Dummett(1976) ただし、ダメット自身が本稿の意味での文脈主義者であるかとなると、疑問を差し挟まざるをえない。

文献リスト

- J. Almog, J. Perry and H. Wettstein (eds.), *Themes from Kaplan*, Oxford 1989
- C. Bianchi(ed.), *The Semantics/Pragmatics Distinction*, CSLI Publications 2004
- H. Cappelen and E. Lepore, *Insensitive Semantics*, Blackwell 2005
- L. Clapp, 'Minimal (Disagreement about) Semantics', in Preyer and Peter (2007), pp.251-277
- D. Davidson, 'Truth and Meaning', *Synthese* 17, pp.304-23, 1967
- M. Dummett, 'What is a Theory of Meaning? (II)', in Evans and McDowell (1976), pp.67-137
- G. Evans and J. McDowell (eds.), *Truth and Meaning*, Oxford 1976
- D. Kaplan, 'Demonstratives', in Almog, Perry and Wettstein (1989), pp.481-563
- K. Korta and J. Perry, 'Radical Minimalism, Moderate Contextualism', in Preyer and Peter (2007), pp.94-111
- I. Maitra, 'How and Why to be a Moderate Contextualism', in Preyer and Peter (2007), pp.112-132
- G. Preyer and G. Peter (eds.), *Context-Sensitivity and Semantic Minimalism*, Oxford 2007
- Z. G. Szabo(ed.), *Semantics versus Pragmatics*, Oxford 2005
- L. Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, Oxford 1953

